
頭のなかで聴こえる…。

保科 郁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

頭のなかで聴こえる…。

【Zコード】

Z8628C

【作者名】

保科 郁

【あらすじ】

他人には聞こえない足音が聞こえるせいで、いじめられている少女のお話。・ハッピーエンド。・アンハッピーエンド。・あなたはどちらがお好みですか？（この話には結末が二つあります）
1話加筆・修正してみました。（10／18・夕方）

「お前、キモいんだよッ」

「…」

「何？その目付き。

何か文句でもあんの！？」

ああ またか…。

私は目の前の人達に気付かれないよう、こつそりため息をついた。
別に何をしたわけでもないのに、投げつけられる言葉や暴力の数々。
見ていたつもりはない。
睨んでいるわけでもない。

そう、それはこの人達も分かっているのだろう。

自分達がしているのはただの言い掛けり 憂さ晴らしながら、と。

私は物心つく頃から変な足音が聞こえていた。

小さい時はそれが人と違うのだと気付かず、色んな人にその事を話したものだ。

でも、それがいけなかつた。

周囲の人たちは私の事を不気味に思い 避けたり無視したり、ついには暴力まで奮い始めたのだ。

いつの時代も 周囲と異なるモノは忌み嫌われるのか…。

私は殴られ過ぎてあまり働かなくなつた頭で、ぼんやりそう思った。

私が反論することはない。

そんな事をすれば 更にひどいことをされるに決まつている。

私は ただ相手の気が済むのを待つだけ……早く終われ、と何度も思いながら。

3

そんな私の様子にその人達は飽きたらしい。

「 ちッ !

もう行こーぜ。こんな奴に構つこたねーよ

悪態をつきながら去つていった。

私は痛む節々をそのままに、あお向けに寝転がる。
空はとても澄んだ色で晴れ渡つてゐるのに、私の心はどんどんとじた曇り空だ。

でも私が涙を流すことはない。

それは……

静かな河原で、誰かの足音が聞こえた。
でも、それが“誰か”でない事は解っている。
この足音は私の頭の中だけに存在するのだ。

ぺたり

ぺた ぺた ぺたり

その足音は、私を心配するかのように周囲をうろついている。
いつも、いつもそう。
誰も私に近づく人がいない中、この足音だけは私を気にかけてくれ
ている。
……そう、感じなのだ。

元はといえば、この足音のおかげで今の状況になつたのだが、この
ことがあるせいか 私はこの足音の事をあまり嫌いではなかつた。

「.....帰ろ.....」

ぼつりと呟くと、痛む体を何とかなだめながら、私は帰路についた。
後ろに足音をまとわり付かせながら。

「ただいま…」

誰も居るはずはないと分かっているのに、つい 泊り、と呟いてしまつ。

家の中は冷えきつて、しん…と静まり返つていた。

ペたペた ペた

玄関で立ち尽くしていた私に、【入らないの?】とでも言ひたげに足音がまとわり付いてくる。

私はそつと頬を緩め 寒さで強ばっていた体を動かし、やつと玄関から中に足を踏み入れた。

リビングに入り とりあえず暖房を入れると、テーブルに乗つてゐる白い物が目に入った。

メモ用紙だ。

父の武骨な字でそつけなく、【遅くなる】と、ただ それだけが書かれていた。

今日も… か。

そつとため息をつく。

別に今に始まつたことではない、父が家に居ないことは。

もうこんな状態が、何年も何年も 下手したら産まれた時から続いているのだ。

きっと私は、父に疎まれてゐるのだろう、顔も… 合わせたくないと思われる程に。

胸がぎゅ と、締め付けられたように痛んだ。

私は窓辺にひつそりと飾られている、写真立てを見た。

そこには今より少し若い父と 今は亡き母が写っていて、母のお腹は膨らんでいることから妊娠中なのだと分かる。

写真の中の一人は今まさに幸せの絶頂だといつくらい、とても幸せそうに笑い合っていた。

私が…この笑顔を壊してしまったから、二人を犠牲にして 自分一人だけのうのうと産まってきたから、だから父は私を疎んでいるのだろうか。

私は…私は、産まれてこない方が……良かつた…のかな？

部屋は暖房で暖かくなっている筈なのに、凍えるように寒い。

私は自分の体を抱き締め、声を殺してむせび泣いた。

自分が誰にも必要とされていない事が、疎まれていることが……身を裂かれるように辛くて。

そんな私を慰めてくれるかのように、周りでは足音が 絶え間なく聴こえていた……。

キンコンカンコーン…

今日も無事に終わった。

チャイムが鳴つて最後の授業が終わり、私はほっと息をついた。厳密に言えば無事とはいえない 小突かれたり足を引っ掛けられたりはした のだが、そんなのは日常的にあるので大した事ではない。

帰り仕度を手早く済ませ、一刻も早く教室を出ようと立ち上がる。だが、そんな私の周囲にクラスの女子が立ちはだかった。

「ねえ、 ちゃんたあ～

「そ～そ～ 私ら用事あるから掃除代わってくんない？」

「そ～そ～

「私達、デートとか友達付き合いとかで忙しいんだよね～」

「 ちゃんなら別に彼も友達もないし、用事もないからいいしちょ？」

キヤハハハハ と甲高い笑い声をあげながら、次々と言つてくる。その顔はニヤニヤと 抵抗できないモノをいたぶれる嬉しさに満ち

ていた。

「じゃ、そゆことでお願いね~」

私が返事をする前にその子達はそう言ご、また甲高い笑い声をあげて去つていった。

どつちにしろ最初から返事を聞くつもりも、断りせんつもりもないだろう…。

私はひとつため息をつくと、教室の後ろにある掃除用具入れに向かつた。

普段 殴られたり蹴られたり を思えば、今日はまだましな方だ……と己を慰めて。

足音を引き連れながら黙々と掃除をする。
教室は意外に広く、一人ではなかなか終わらない。
もう適当にして帰ろうか…とも思ったが、明日何を言われるか分からないから仕方なく続ける。

ぺたぺた

「お前に手伝つてもらえたならなあ」

そんな事は無理だと解つてゐるけれど、ついそんな咳きをもらしてしまふ。

カタツ

その時、突然 背後で物音がした。

勢よく振り向いた私が見たものは、足音の主…………ではなく、ク

ラスメイトの××さんだつた。

「…さん、

今日掃除だつて…？」

××さんは クラスでいつも単独行動をしていり、一匹狼のような感じの人だ。

普通ならそういう人もイジメの対象になりそうなものだが、この人は不思議な雰囲気を醸し出していて そういう事になつたりしない。私とは……違うのだ。

「うん 代わつたんだ」

そんな もの思いを断ち切り、ぱつり と答える。

「やつ
」

彼女は何も言わず帰る用意をしだした。
何も言わぬが、これがイジメなのはきっと気が付いているだひつ。
でも彼女はそのイジメに便乗することも、逆に私を慰めることもしない。

ただ淡々とその様子を受け流すだけだ。

彼女は数冊の本を鞄に詰め込むと さつさと教室を去つていった。

私の胸に、落胆の感情が沸き上がる。

「…何故…？」

私は彼女に何かを期待していたのだろうか。

優しい言葉を ？

手伝ってくれる事を ?

彼女の無関心は今に始まつたことではないのに。

私は深いため息をつくと、掃除をしつかり終わりてから帰路についた。

行きも帰りも いい気分で歩くわけではないが、今日は特に気分が重い。

ため息ばかり出でくる。

橋の上に差し掛かり 何となく川を覗き込むと、夕日が反射して水面がキラキラと輝いていた。

そんな綺麗な風景も私の心を癒してはくれない。

このまま落ちてしまうのもいいかもしない。
ふと、そんな事を考えてしまつ。

橋の手すりに体を預け、しばらく ぼ～…としていると、

ペたペ

急に わざわざ私の周りをつらつらしていた足音が ぴたり、と止んだ。

今まで足音が消えた事など無く、不審に思つた私は 何となく後ろを振り返つた。

そこには……、クラスの女子が私に向かつて両手を突き出すとされていた。

私が振り向くとは思わなかつたのだろう、彼女は驚きで目が真ん丸になつていた。

そして 押そうとした場所に私の背中がなかつたものだから、彼女は勢い余つて自分が川に落ちていつた。

一瞬 何が起こつたのか分からずに硬直したが、大きな水音と それに続いてバシャバシャともがく音を聞いて我に返つた。急速に頭が回り始める。

え、落ちた の!?

助けなきや !

でも私を突き落とそつと した?

自業自得 。

いつも、いつもイジメられて 。

色々な考えが頭を過つたが、それを理解するより早く 私の体は動いていた。

次の瞬間、体に強い衝撃が走り 次いで身を切るような冷たさが体内を包む。

それらに負けないよう腕を大きく動かし 彼女の方に近づこうとしたが、体に制服がまとわり付き思うようにいかない。

そうしている間にも彼女の動きは弱々しくなつて……ついには、頭まで沈み見えなくなつてしまつた。

更に急いで彼女の所に進んだ私は、すぐに水中に潜り 辺りに手を

彷徨さまよわせた。

何も掴めない ！！

私は焦りながらも、もう一度息を大きく吸い込み潜る。
目を懲らすと 右下の方に白っぽい物が見えた。

きつと制服だ！！ 私はそう確信し、その方向に懸命に手を伸ばす。

一度、二度……制服は手をすり抜けていったが、三度田でようやく
掴み込むことができた。

私はそれをしつかり握ると、力を振り絞って水面を田指した。

「 ッは！――！
げほッ げほッ！――！」

水中から出て、むせながらも思いつきり空気を吸い込む。
隣に抱え込んだ彼女を見ると ぐつたりとはしていたが、死んでは
いないようだつた。

ほ としたが、もう私は体力も気力も限界だ。

震える手でなんとか彼女の制服を川縁のでっぱりに引っ掛けた。
必死でその作業を終わらせると、私は彼女から手を離し川の流れに
身を任せた。

少しばかりの達成感を胸に抱き、心のどこかで安堵しながら……。

そうやつて私が緩やかに沈んでいこうとした時、私の手に何かが触

れた。

私はそれを
……

掴んだ 5へ。
掴まなかつた 6へ。

思わず握ってしまった。

もう死んでもいい…、そう考へながらも 心のどこかでは【死にたくない】【もっと、生きていたい…】と思つていたのかもしれない。

そんな私が掴んだモノは 誰かの手だつたらしく、思いがけず強い力で引っ張り上げられた。

水中から顔が出ると肺が酸素を求め、急いで空気を吸い込むとする。

「 がはッ げほげほッ！…！」

その本能に体がついていかず、激しく咳込んでしまう。

しばらくして やつと呼吸が落ち着き、ゆっくり皿を上げると そこにまた教室で見た顔、…… ××さんが顔をしかめて立つっていた。

「あなた…とんだお人好しね。

イジメられてたのに 自分の身を挺して助けるなんて…」

隣にぐつたりと横たわっている彼女を見やり、そう言い捨てる。

「そんなんじゃ……ない

私は思わず反論していた。

「…そんなんじゃない。

別に人助けだなんて思つてない。

ただ、嫌だつただけ……目の前で誰かが死ぬのが

そう、ただの自己満足だ。

きっと他の場所で彼女が死んだのなら、喜ぶまではいかなくとも
ほつとはしだらう。

べたり

うなだれていの私の横で、あの足音が聞こえた。

「……そんな風に もつと本音を出した方がいいんじやない？」

何の感慨もなきつに ××さんは言い、私の横を見て更に続けた。

「あなたのお姉さんも心配してゐるわよ……」

……姉？

確かに私には一人姉がいる。

いや、いた……と言ひべきか。

でも彼女は、私と共にこの世に産まれ落ちた時には すでに亡くなつていたのだ。

何故 ××さんは、姉を知つてゐるような口ぶりで話すのだらう。

私の怪訝そうな表情に気付いたのか、 ××さんは言葉を加える。

「……？」

もしかして気付いてないの？

いつも あなたの傍にいるのみ、彼女

ぺたり

私の頭の中に、いつもいつも 私と共にいてくれたあの足音が響く。

…まさか……！？

その考えを読んだよ！、「××さんは言ひへ。

「あなた、いつも足音が聞ひえたるんでしょ！」

「それがお姉さん…なのよ」

「お 姉 ちゃん ？」

私は恐る恐る、足音の方に尋ねてみる。

ぺた、ぺた ぺたり

足音は楽しそうに音をたてた。

まるで 私に気付いてもらえたのが嬉しいかのよう！、「うだ…と認めるように軽やかに。」

本当に…… そうなんだ。

あまりにも信じ難いことだが、××さんは そんな嘘をつく理由も必要もない。

きっとそれが真実なのだろう。

私は今までずっと一人だと思つていた。

私が消えてしまつても、誰も悲しむことはないのだ……と。

でも……でも実際は違つたのだ。

こんなに身近に……こんなにすぐ傍に私の事を心配して、寄り添つてくれている人がいたのだ。

私は知らず知らずのうちに涙を流していた。
胸が…胸が苦しい……。

でもそれは今までの様に 辛く悲しいものではない。
私は生まれて初めて、嬉しさでも胸が苦しくなる事を知った。
涙を流すことが、辛い時以外にある事を知った。

私は…、私は今までなんて愚かだったのだろう。

誰も私を気にかけていないと思い込み、自暴自棄に生きてきた。
いや 生きていたとは言えないかも知れない。
ただ死ぬことをしないというだけで、生きよつともしなかつた私は
死んでいる状態だったと言つてもいいのかも知れない。

「私、ずっと…

あなたの…その投げ遣りな態度が嫌だつたのよ…。
自分なんかどうなつてもいい…って感じが

××さんは…ずっと、私に対して怒っていたのだろう。
自分の感情を出すことに、生きることに無気力な私に。
だから彼女はただ傍観するだけを選んだのだ。

「さつきみたいに、自分の気持ちを出せばいいじゃない。
黙つてたら誰も解らないわ。
お姉さんとは違つんだから…」

そして顔を背け、少し…不機嫌そうに続ける。

「なんなら、私が…その。
リハビリに付き合つてもいいし…」

でもその顔は真っ赤だ。

それは夕日のせいばかりではあるまい。
私は顔が緩むのを感じながら答えた。

「…ありがとう」

きっと、そんなにすぐ上手くいくものでもないだろう。

また私は逃げ出してしまってそうになるに違いない。

でも…、この足音、姉と××さんが傍に居てくれるかぎり、私は前を向く事を諦める」とはないだろう。

誰かが傍に居てくれると…、それだけでこんなに嬉しいと感じるのだから。

自分がここに居ていいのだと、存在していても良いのだ…、と思えるのだから。

5（後書き）

主人公　は父子家庭です。

母親は姉と一緒に亡くなつていて、そのせいで父親は　に対して無意識に冷たい態度をとつています。

それで余計に○○は、自分は不必要な人間なんだ　と思つていたわけです。

姉は産まれた（死んだ）時から○○の傍にいて、○○は双子なのでその足音が聞こえていたわけです。

双子には実際、奇妙な繋がりがあるらしいです。

遠く離れた所にいても、片方が怪我をしたら　もう片方も痛みを感じるのだとか。

双子の神秘ですね。

××は靈感少女です。

お姉さんが心配そうにしているのを見ていたから、苛立ちも強かつたのでしょう。

この話は、両方の結末を合わせてひとつ的作品になっています。

一応、ひとつずつでも分かるようにしてあるつもりですが、もしかしたら分かり辛いかも知れないです；

……掴まなかつた。

本当に……もうどうでもよかつた、この世に未練なんかない……。
私はそのまま意識を無くした。

次の瞬間、思いがけず強い力で腕を引っ張り上げられた。
水中から顔が出ると肺が酸素を求め、急いで空気を吸い込もうとする。

「 がはッ げほげほッ！－！」

その本能に体がついていかず、激しく咳込んでしまう。
しばらくして やっと呼吸が落ち着き、ゆっくり目を上げると そこにはわざと教室で見た顔…… ××さんが顔をしかめて立っていた。

「 ……あなた…？」

それだけ咳くと、私の隣をじっと見つめてきた。

ペた……

それに反応するかのよつて足音が聞こえてくる。
でも 私にはもうどうでもよかつた。
その、足音も。

田の前に立る××さんも。

私はぼんやりと周りを見た。

すぐ近くに、さつき川で溺れていたクラスの女子が倒れていた。その顔を見ても、もう何の感情も湧いてこない。

「……あなた、」

「おい！あんたら大丈夫か！？」

××さんは、今度は何かを言おうと口を開いたようだったが、おじさんが慌ててこちらに向かつてきました。諦めたように口を開きました。

ペたペたペたペた…

足音も何か言いたげに私の周りをつめつめしていたが、私はそれを意識の中から追い出した。

おじさんは気を使って色々してくれたけれど、私はそれらを断り足早にその場を後にした。

そして、その日、私は初めて安らかな眠りについた。

次の日、クラスメイト達の態度は一変していた。

昨日の女子が助けてもらつた事を大袈裟に語つたらしかつた。今まで虐めていた子に命懸けで助けられて、感動したのだとか。涙ながらにばつが悪そうに謝つてくるクラスメイト達に、私はにこり、と微笑みを“作る”と、

「ううん、私の態度も悪かつたから。これから仲良くしてね

と言つて“やつた”。

そんなにすぐ人の気持ちは変わるもんじゃないのに、クラスメイト達は急に態度を変えた。

だったら、またいつ変わつてもおかしくない。

そんな人達と仲良くするなんて考えられない。

でもそんな事を言つたら、またイジメの対象になるのは田に見えている。

本音を出して虐められるへりこなり、上辺だけでも仲良くしておけばいいのだ。

それが処世術というものだ。

“彼女”はそれができなかつた。
本音を出すことすら、できなかつた。
だから ダメだつたのだ。

ペた…ペた…

私の周りで“彼女”の足音が聞こえてきた。
でも もう返す気はない。
ずっと、ずっと欲しかつたのだ。
この世界で生きているという実感がもてる“身体”が。
彼女は身体を持つてゐることが どれだけ幸福なことなのか知らず、
手放してしまつた。

だから私が貰ったのだ。
今更後悔しても遅い。

ぺたり…ぺたり…

私は“彼女” 私とは違い 死ぬことなくこの世に産まれること
ができていた、
私がずっと付き添っていた妹に向かって、にっこり と極上の笑顔
を浮かべてやった。

（ア）

6（後書き）

こいつのラストは救われないというか、なんというか…。
でも、こいついう皮肉な終わり方も嫌いではないです。
教訓的な意味合いで。

足音の所、姉と妹で微妙に変えてあるのですが、気付かれましたでしょうか？

…些細な事すぎて、分かり辛いかもしれないですね（^_^;）

この話は、両方の結末を合わせてひとつ的作品になっています。
一応、ひとつずつでも分かるようにしてあるつもりですが、もしか
したら分かり辛いかもしれないです；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8628c/>

頭のなかで聴こえる…。

2010年10月28日08時30分発行